

氏名 檜原理恵

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護研究 I	152	看護研究 II（基礎看護学）	9
看護学原論 I	158	看護学原論 II	158

2. 理念

看護はあらゆる感性が必要になる。人によってイメージが異なるが、求められる看護職人材でありたい。

3. 方法

初学者である学生さんが、看護に興味を持つこと、学修する態度を形成することを目的に、講義内でミニテストを課すとともにディスカッションを取り入れています。また、反転授業やディベートを通して自らの思考を言語化し、他者に伝える力を身につけてもらいます。

4. 成果

学生さんからの評価はおおむね良好ですが、知識の獲得が難しい結果となっています。

5. 改善

ミニテストのフィードバックを丁寧に行い、知識の獲得がスムーズになるように努めます。

6. 教育活動

アドバイザー、サークル顧問の担当はありません。

氏名 佐久間佐織

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
基礎看護技術Ⅲ	158	看護研究	158
基礎看護学実習Ⅰ	157		

2. 理念

『自ら考えて行動できる看護専門職者の育成』

聖隷クリストファー大学看護学部の教育目標では、「人間や環境についての基礎知識を幅広い視野から体系的に修得する能力を育成する」が挙げられています。また、卒業認定・学位授与の方針（DP）では、「様々な価値観や立場、意見を尊重した対人関係能力と論理的表現力を身につけている」「看護専門分野や諸学の学識を用いて課題を探究し、多面的に考察することができる」とあります。

私が所属する基礎看護学領域では、看護の基本的な知識と技術の習得を目的とした科目を担当しています。看護専門職は、知識や技術をもとに自ら考えて判断し、行動することが求められます。そのため、私は、学生が看護の基礎的な知識や技術を、「クリティカルな思考」で、「自ら課題を探究できる」こと、そして、「学ぶことを楽しめる」ことを大切にしています。「自ら考え行動できる力」は、短期間で身につくものではありません。日ごろの授業や演習、実習から主体的に考え、積極的に行動することができるよう、支援していきたいと思っています。

私が、学生に求めることは、「誠実さ」です。

3. 方法

基礎看護技術Ⅲ：

この科目ではフィジカルアセスメント、看護過程を学修するため、人体の構造と機能、病態や症候などの知識も必要となります。学生がこれらの知識を想起して知識を積み重ねられるよう、事前課題、事後課題を設定しました。自分の頭を整理できるよう、手書きの課題

とし、毎回教員が評価、コメントを記載してフィードバックしました。

看護研究：

研究についてのイメージができるよう、説明の際には例示を多く取り入れました。

基礎看護学実習Ⅰ：

学内でのオリエンテーションでは、臨床に出るための心構えや事前学修、誠実さが必要であることを意識して説明しました。

実習施設への通学に無理が生じないように、事前に通学時間や病院アルバイトなどについてアンケートを実施し、可能な範囲で調整しました。また、実習についての不安や懸念事項について、個別に面談する機会を設けました。

教員間、臨床指導者と目標や指導方法・内容について共通認識できるように、実習指導要領を作成しました。また、実習目標ごとのルーブリックを作成し、学生と実習の到達度を共有できるようにしました。

4. 成果

基礎看護技術Ⅲ：

新カリキュラムにより、今年度から開始された科目でした。授業評価はよかったのですが、平均 GPA が低くなっていました。

看護研究：

この科目は、これまで5セメスターに開講されていましたが、新カリキュラムで4セメスター開講となりました。成績評価はレポートが中心だったため、GPAは高い結果だったのではないかと考えます。授業評価は、目標達成や成長の実感の項目が他の項目と比較して低値でした。領域実習前の段階であり、臨床経験が少ないなかで看護研究を学修することの難しさを実感しました。

基礎看護学実習Ⅰ：

授業評価の平均値は集計されていませんが、おおよそよい評価でした。はじめての臨床での看護実践に参加し、貴重な学びができていたと思います。教員や臨床指導者の関わりがサポートティブでとてもよかったという意見が大半でしたが、反面、教員の指導の言動の不適切さについての指摘もありました。

5. 改善

基礎看護技術Ⅲ：

既習の人体の構造と機能、病態や症候、看護技術などの知識をどのように使って判断するのか、ということを具体的に説明するようになりたいと思います。

看護研究：

看護研究に対して、難しいイメージではなく、興味・関心を持てるような工夫が必要だと思います。

基礎看護学実習 I :

定期的な会議を設け、教員間で統一した指導を心がけていますが、より密に情報共有ができるよう努めていきたいと思えます。

6. 教育活動

アドバイザー 主担当 16 名 (1 年生 4 名、2 年生 3 名、3 年生 4 名、4 年生 5 名)

学生 FD スタッフの活動の支援

氏名 大石ふみ子

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護倫理	152	災害看護論	152
病理・病態	158	疾病・治療学 I	158
疾病・治療学 II	158		

2. 理念

看護倫理において、看護師があるべき姿を述べた「日本看護協会の倫理綱領」について教育している。看護の倫理綱領の第一条は、「看護職は、人間の生命、人間としての尊厳及び権利を尊重する。」というものであり、本学の理念と親和性が高い看護という仕事について説明を行っている。

学部学生のアドバイザーとして、一人一人の学生の大学生活、学修に必要な関心を注ぎ、一人の成人である学生を尊重して見守る姿勢で関わっている。

3. 方法

講義では苦しむ人への看護師の関わりの例を分析し、倫理の原則や綱領と照らして説明するとともに、本学の理念である隣人愛が、倫理原則よりもさらに看護の目指す姿そのものである事を、学生とともに考える時間を設けている。

4. 成果

事例を用いて看護のあり方、そして、その目指すところの本学の理念との一致について、多くの学生がリアクションペーパーで言及し、大切さをかみしめていることがうかがえる。授業評価においても概ね良好であり、抽象的な内容でありつつもわかりやすさが評価されている。

5. 改善

常に新しい事例にアップデートし、学生が自らと親和性を感じられる分析と説明を心が

ける必要がある。

6. 教育活動

学部においては、2年生への家族看護論、成人看護学概論にて講義担当するほか、3年時の実習、そして4年時の看護倫理と、学生の成長に沿った教育を行っている。

氏名 藤浪千種

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
成人看護援助論Ⅱ	152	看護研究Ⅱ（成人看護学）	11
看護統合セミナー（急性期看護学）	69	統合実習（急性期看護学）	24
キャリアデザイン（2022年度入学生・看護学部）	158		

2. 理念

医療の現場で働く専門職には様々な知識が求められますが、大学での授業時間には限りがあります。また日々目まぐるしく変化する臨床の中では、必要な知識がその時々で変化することも珍しくありません。そのため、授業では各トピックにおいて重要なことや学生の皆さんが自ら自身の学びを深化させられるようなことを大切にしていきたいと思っています。

3. 方法

講義、演習、実習、ゼミナールなどの形式で学修を行いますが、その中で学生の皆さんの主体的な学修が進むような方法を積極的に採用しています。

4. 成果

2023年度は、152名の履修者があった成人看護援助論Ⅱで3.0以上の評価を頂きましたが、GPAが2.08であり成績に格差があったように振り返ります。当該科目では覚えなければいけないことが多々あり、学修ベールラインが異なる学生の皆さんが集団で学ぶ形式であるため、個々に合わせた支援が行き届かなかったと推察しています。

5. 改善

2024年度が学生の皆さん個々の学習ニーズにこたえられるよう、事前事後学修の工夫にさらに力を入れたいと思います。

6. 教育活動

学部、大学院の授業・演習・実習を担当しながら、アドバイザーの役割なども担っています。

氏名 山田紀代美

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護研究Ⅱ（老年看護学）	5	老年看護学概論	158

2. 理念

老年看護学領域は、新たな専門領域として誕生してから間もないことに加え、加齢に伴う身体的・心理的・社会的側面を統合してとらえる必要があること、支援においては、社会・経済的な影響を受けることなどから学際的なアプローチが求められる領域といえる。今後の高齢社会を見据え、学生には高齢者の理解を深め、高齢者に対する尊厳を持ちながら関わってほしいと願っている。特に、老年看護学では、高齢者の多様性に配慮するために、様々な理論や価値観について教授していることから、初学者には理解に時間がかかることもあるかもしれない。しかし、正解が一つでない分、想像力を働かせることで新たなものを発見することにつながる可能性もある領域といえる。これらを意図して講義している。

3. 方法

講義はオムニバスであることから、それぞれの教員により方法を工夫した。ある教員は、臨床の経験を活かし、高齢者の特徴について事例を通して生き方や考え方、あるいは入院中の高齢者の様子などを生き生きと語ることで高齢者のイメージ形成に貢献していると考えられる。また別の教員は、高齢者の健康問題やその支援方法について、最新の研究結果を図や表を用いて視覚的に伝えるように努めた。また、毎講義終了時には学生の講義の理解度を問うための課題を出題し、それに回答することで講義内容の定着を図るようにした。

4. 成果

教員の GPA については、昨年度よりも点数が上昇した。講義については事例を交えてより具体的に教授することで、高齢者や老年看護学への興味関心を持つことができたとの感

想が見られた。また、研究論文等のデータを使うことでより科学的根拠の重要性を認識した学生もいた。さらに、実際の高齢者へのインタビュー内容をグループワーク、その後全体発表と発展させることで、より多様な高齢者の生き方や価値観に触れることができ、学生の高齢者観の形成に寄与したものと推察する。

5. 改善

昨年度の意見として、レポート課題の提出において、定期試験の時期を考慮してほしいとの学生の要望を受けたことから今年度は時期を早めてより効果的な学習となるように配慮した。その結果、評価が改善したことから、この点は良かったと考えている。しかし、授業評価の回答数が5割を割っていることから、次年度はより多くの学生が授業評価に参加できるように授業評価の時間確保など方法を検討する計画である。

6. 教育活動

なし

氏名 藤本栄子

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
母性看護学概論	159		

2. 理念

自分で考え判断でき、行動できる力を身につけた人の育成を目指して教育に携わっている。

また、学生が4年間の学修成果として、隣人愛を基盤に、論理的・科学的な知識・技能を身につけ、看護の提供場面で行動できる力を発揮することを目指して教育に携わっている。

3. 方法

1. 学生とのやり取り：

- ・学生の感じたことや意見を聞く時間を入れて、双方向性の授業となるようにする。

2. 授業の工夫：

- ・初回のオリエンテーションで、講義スケジュール（単元）を示し、目的に沿って、何をどのような順序で学習するかを示す。

- ・各単元が母性看護学の主要な概念と関係するかを伝えながら、

- ・事前学習で必要な知識を整理できるようにする（Nursing Skills、ビジュアルを活用する）。

- ・事前学習内容と授業を繋げられるように、質問を投げかける。

- ・学生が、妊婦さんや育児期のお母さんに体験を聞ける機会を持ち、対象を具体的にイメージできるようにする。

4. 成果

2022年度の学生の授業評価アンケートでは、「学習意欲の向上」や「授業の満足度」は比

較的高い (3.6 以上)。

また、2023 年度の学生の授業評価アンケートの「授業目標の達成」は、項目の中で一番低かった (3.37)。

2023 年度の GPA は、2022 年度と比較して下がっている (2.33→2.18)。

5. 改善

2023 年度から新カリキュラムとなり、母性看護学概論は、母性看護援助論の時間数を 30 時間から 15 時間に変更したため、単元の内容の変更があった。

変更点は、妊娠・分娩・産褥期および新生児の異常が加わったことである。

この単元の基盤となる専門基礎科目、特に解剖・生理および疾病・治療論（高血圧、糖尿病等）の理解のために、事前・事後学習を促す。

6. 教育活動

・静岡県西部地区で、母子保健に関わる病院・地域の保健師・助産師・看護師等の連絡会を開催し（2 回/年）、支援を必要とする母子への継続的な支援活動に携わっている。

・大学院看護学研究科博士前期課程（ウィメンズヘルス看護学）、後期課程（リプロダクティブ・ヘルス看護学）を担当している。

・助産学専攻科の親子関係論を担当している。

氏名 市江和子

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護研究Ⅱ（小児看護学）	7	小児看護学概論	158
子どもの保健	26		

2. 理念

看護学生が、大学の理念である「愛と奉仕の精神を受け継ぎ、地域に貢献し、国際社会においても活躍できる専門職を育成する」ことをふまえ、4年間の学修の成果として、自ら考え行動する力を持った人間となり、看護や保育の専門職としての知識・技術・態度を発揮できるようになることを目指して教育に携わっている。学習者の主体性の尊重と自主的に学習できるようにするために、学習の状況や個別性をとらえた支援を留意している。

3. 方法

担当科目の初回に、15回の授業内容、ワークシート、事前事後課題を学生に詳細に提示している。学習者が、授業全体のイメージをもち、自らが学習計画を立て授業に臨めるような工夫をした。ワークシートやリアクション等、課題は全て学習者に返却し、学生の意見を取り入れた授業であることが実感できるようにするとともに、学習者の疑問に対応できるようにした。また、授業計画では、科目の単元の順序性をふまえ、学習者が授業計画の流れに沿って学習することや、子どもの抱っこや離乳食を学生が実際に経験するなどの体験学習を取り入れながら授業を行った。

学習者が、4年間の学修の成果として、主体性の尊重と自主的に学習できるようにするために、看護や保育の専門職としての知識・技術・態度を発揮できるようになることを目指して教育に携わっている。

4. 成果

学習者ごとに担当科目の分析を行い、リアクションペーパーや授業評価の内容をともに、次

年度のシラバスや授業内容にいかしている。

5. 改善

学生からのリアクションや授業評価をもとに、授業内容、課題などを検討し、改善をはかっている。

6. 教育活動

氏名 宮谷恵

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
キャリアデザイン（2021 年度入学生・看護学部）	152	小児看護援助論Ⅱ	152

2. 理念

「相手の個別性をとらえてその人を尊重しながら、その人に合った対応を考え、その人の自立を目指して関わる」という看護の考え方は教育に通じると思い、その理念に沿った実践を心がけています。

3. 方法

イラスト、動画やニュース記事も多く取り入れて、学生の興味をひく分かりやすい説明をすることを心がけています。学生が書いてくれる授業の感想・質問コメントは全部目を通し、次の授業時等にちゃんと答えるようにしています。

4. 成果

小児看護援助論Ⅱは授業評価がなかったのですが、学生からのコメントをみると授業を受けて考えたり学んでいてくれることがわかりました。キャリアデザインは2 学年同時開講で試行錯誤しながらの授業でしたが、学生のコメントからは授業を通していい刺激を受けていたことが伺えました。

5. 改善

学生の授業の感想・質問コメントの中に書いてくれた授業改善への意見は授業時に内容を公開し、改善できるようにしています。

6. 教育活動

アドバイザーグループの学生にはもちろんですが、アドバイザーとなっていない学生も就職や進学等の相談に来てくれるので、同じように対応しています。患者会系のボランティア活動では、今年も学生に協力してもらうことができ、学生は学びを得ていたと思います。茶道部の顧問も長年担当しています。

氏名 入江拓

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
聖隷の理念と歴史	177	聖隷の理念と歴史	173
看護研究Ⅱ（精神看護学）	7	精神看護学概論	158

2. 理念

東京の大学で、言語学を学んでいた大学4年の秋、「聖隷の創設者」長谷川保先生の著書に出会い、本物の聖書信仰と福祉の実践が学びたいと、長谷川保先生に会いに浜松に来ました。保先生から交換条件を出され、その場で、東京での就活や内定を放り出して、それまで看護に興味も関心もなかった私は、本学看護学部に入学することを決めました。本学看護学科を36年前に卒業し、精神科病棟、外科病棟で看護師としての経験を重ねました。

養育里親/専門里親として小さな共同体を営んで31年になります。親の身体疾患・精神疾患や、経済的困窮、死別、虐待、拘留など、様々な事情で実親と暮らすことができない乳幼児から思春期までの複数の子供を、児童相談所からの措置児童として都度家族に受け入れ一緒に暮らしてきています。我が家を巣立った子供たちとの交流はいまだに続いています。

7年前に突然片目を病気で失明し、暗闇の中に突き落とされました。それとちょうど同じ時期にダウン症で生まれ、乳児院に実親の面会もなく長期間置かれた子供と出会い、裁判所の審判を経て、彼を特別養子縁組で実子として家族に迎え入れました。彼の実母も、私と同じく暗闇の中にいたのでしょうか。18年共に暮らす重度知的障害の里子や実子も交えて、相変わらず「弱さを抱える共同体」を営んでいるという変な家族です。

精神科の患者さんとの出会い、里親としての子どもたちの出会いと離別を繰り返しながら、弱さと限界を抱える人間同士が「共に生きる」ということの意味について考えながらそのような生活を大切にして、悲喜こもごもを重ねてきました。

「キリスト教精神に基づく生命の尊厳と隣人愛」という本学の抽象度の高い「建学の精神」を、すべての担当科目でどのように伝えてゆくか、その方法や機会について、前述の自身の

経験も踏まえて試行錯誤を重ねてきました。

建学の精神の神髄に触れれば触れるほど、人から強いられてではなく、自分から人に伝えずにはいられなくなる・・・、建学の精神とはそ本来のようなものだと思います。

2023年11月より自宅を開放して「子ども SOS 静岡」を開設しました。育児が大変なお母さんをサポートする、子どもさんお預かりの無料・無期限のボランティアです。就学前のご兄弟や、医療ケアが必要なお子さん、妊娠相談、子どもも食堂のようなことを始めました。楽しいことばかりではありませんが「共に生きる」とこの実践だと思って、それなりに味わいながらやっております。

ユーザーでもある、様々な理由で社会制度にのりにくい状況の中で、日々の生活を必死で回す人たち（本学の学生さんたちと年齢時にはほとんど変わらない）との出会いを通していろいろなことを想わされます。

3. 方法

建学の精神や理念について学生と教員が問いを立て合い、自然に論議するための心理的安全性が担保しやすいという意味で、担当する「聖隷の理念と歴史」や「精神看護学」関連の教授内容、「精神看護学実習などは、科目としてのアドバンテージが高いと考えています。

大人数のクラスでは、学生の全リアペの内容をカテゴリライズし、経年的に蓄積し、それに対する教員のコメントを学生全員に配布、共有することで、各学生たちがお互いに触発し合えるような試みを続けてきました。蓄積されたそれら学生さん達との応答は、膨大な量になりますが、アクティブラーニングの教材そのものとなっています。学生がそれらから触発されるのは、様々な自由な視点への気づきや、そこから得る洞察の面白さと自身のものの見方の変化、そしてそれらによって形作られる、「対人援助職としての人間観」です。

抽象度の高い建学の精神の重要概念である「隣人愛」と「生命の尊厳」については、その概念に依って立つ抽象度を下げた媒体を作成し、様々な場面で「教材」として活用しています。

4. 成果

建学の精神の理解に資すると思われる概念図（私論）に関しては、本学紀要に卒業生である教員と2018年～毎年投稿し、講義や実習で運用し、評価を重ねています。それらを通して、抽象度の高い建学の精神の重要概念を、学生は自身の経験に引き寄せて理解し、言語化し、共有するということが不安なく行えるようになってきました。

抽象度を下げたそれらの概念モデルは、特に精神看護学実習での学びの深化と教育方法の改善に活用されており、それらの成果を看護学部教員の共有知とすべく論文執筆を重ねてきており、今年度は看護教員の教育的あり方について学会発表や、ディスカッションの糸口になればと思い、本学紀要にほぼ毎年投稿を重ねています。

また、全学の教員に対しては「全学FD研修会」の機会を借りて、私論として発表し、今後も建学の精神を教育的に伝えながら、「建学の精神に基づく教育文化」が醸成できるよう

に試行錯誤を重ねてゆきたいと思っています。

GPA 等の評価から、いわゆる本業の「精神看護学」科目よりも、建学の精神に関連のある科目に力点をそしているのがわかります。建学の精神を掲げる私学のミッションを伝える上では、精神看護学関連科目はそのための「方法」としてアドバンテージが高い授業科目だと思いながらやってきました。

5. 改善

本学の自校教育科目である「聖隷の理念と歴史」や、新カリで今年度から始まった「聖隷看護基盤実習」と連動させながらの人格的交流を通じた教育的営みは、学生それぞれの卒業後の生き方にあらわれてくるのだろうという思いで、短期の指標に一喜一憂しないように心がけたいと思います。

また、精神看護学関連科目に関しては、年度によって学生集団の特性に違いがみられるものの、GPA や学生による授業評価結果を指標に改善に取り組みたいと思います。

6. 教育活動

私学の存立基盤は「建学の精神」です。

したがって、すべての教育活動はいつもそれを心に留めつつ、具体的な教育方法などの試行錯誤を続けています。

国家試験合格のための教育や訓練は勿論大切なことですが、建学の精神を纏った対人援助職を輩出することが「私学である本学のミッション（使命）」ですから、担当する科目をいかに「手段」としても活用して、建学の精神を伝えるか、その種を学生さんの中に蒔くことができるかに留意しつつ、教育（研究）活動を行っています。

氏名 酒井昌子

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護研究Ⅱ（在宅看護学）	4	看護統合セミナー（在宅看護学）	45
地域包括ケア看護論	158		

2. 理念

地域包括ケア時代を支える看護専門職として地域や健康課題のある人を生活者としてとらえる視点を育てる。

関わる全ての対象の人々の尊厳することができる。

事例をもとに自助、互助、共助、公助のうち、互助の視点で地域の社会資源や活用、開発を考えることができる。

3. 方法

地域で暮らす生活者としての健康課題のある人や障害者、その家族による当事者の話をきき、自立と支援について、地域包括ケアシステムの理念である「すべての人が地域でその人らしい暮らしができる」ことについて考えることができる。地域共生社会の「我がこと、丸まると」を理解するために各領域（老年、成人、精神、母子）からの地域包括ケアのあり方を学ぶ。

4. 成果

レポートから、健康課題や障害のある人の自立した生活とその過程について当事者の話や事例展開 PBL を通して、地域包括ケアシステムの自助、互助、共助、公助の視点から、自立と支援のあり方について視野を広げることができきていた。地域包括ケアシステムについて単なる制度だけでなく、その理念や体制および専門職としての役割を具体的に考えることができていた。

5. 改善

事例展開 PBL 演習については、学習進度から難易度が上がったので、ゆっくり事例理解や課題解決の方向性について PBL に基づき、枠組みを強要することなく、学生の関心から主体的な学習によって展開できるように組み立てる。評価の基準がやや厳しかったため、今年度は検討する。

6. 教育活動

氏名 山村江美子

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
地域在宅看護学概論Ⅰ	158	地域在宅看護学概論Ⅱ	158
家族看護論	157		

2. 理念

地域在宅看護学概論Ⅰ：1年次生の秋 Semester から、地域在宅看護学について学びます。地域という概念について学び、看護の対象者は、地域で暮らす人々であるということを理解できるように講義をしています。たとえ治療の場で患者さんとして出会ったとしても、地域で暮らす人として捉えるように伝えています。看護実践についても、訪問看護師だけではなく、病棟看護師・退院調整看護師・外来看護師と、地域在宅看護論の視点が求められていますし、実践をしていることを伝えています。

家族看護論：2年次生春 Semester 2年次秋 Semester から開始する領域別看護概論の開始前に、家族看護論を学びます。看護の対象には家族が含まれていることを、概論が始まる前から学修をします。

3. 方法

地域在宅看護学概論Ⅰ：第6回、第7回の講義では、地域を理解するという個人ワークを行い、その後他者との共有の時間を設定します。対象となる患者・療養者・家族を中心として、地域をとらえるワークを行っています。

家族看護論：教員4名のオムニバスの講義科目です。成人看護学・小児看護学・精神看護学・地域在宅看護学の教員が、事例を提示しながら、分かりやすく家族も看護の対象であることを講義をしています。

4. 成果

地域在宅看護学概論Ⅰ：看護の対象が、地域で暮らす人々であるという新しい視点に気が

付くことができたという授業評価を受けました。治療の場の看護、地域における看護が連携していることも理解ができ、今後の看護の視点につながったようです。

家族看護論：2年次生の早い時期に家族看護論を履修したことに、意義を感じたようです。教員によるオムニバスの担当も、実体験や事例を通して、とても分かりやすく新鮮であったという評価を得ました。

5. 改善

地域在宅看護学概論Ⅰ：訪問看護の実際については、ビデオ視聴ではなく、訪問看護ステーションの所長さんに講義をしていただいて、さらなる理解につながるようにいたします。

家族看護論：新カリキュラムでの2年目の開講となります。オムニバス担当教員4名は2024年度も継続して担当し、それぞれの昨年度の講義の内容の精錬に努めます。共に考えるという姿勢をもち、担当します。

6. 教育活動

2022年度・2023年度、国試委員長を務めました。1・2年次生からの知識の積み重ねの重要性を、講義を通して伝えていきます。

2024年度は、就職担当として「社会人基礎力の評価」をどのように実施していくのか、効果的・効率的な方法を考えていきます。

氏名 江口晶子

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護研究Ⅱ（公衆衛生看護学）	2	看護統合セミナー（公衆衛生看護学）	45
統合実習（公衆衛生看護学）	15	公衆衛生看護活動論（2021年度入学生）	75
公衆衛生看護活動論演習	74	公衆衛生看護総合演習	124
公衆衛生看護学概論	158	公衆衛生看護推論	69
公衆衛生看護活動論	69	公衆衛生看護学実習Ⅰ	157

2. 理念

私の教育理念は、公衆衛生看護の視点をもって看護の意味やあり方を考えることができる看護職者を育てたいというものである。地域間、個人間の健康格差の拡大、人々の健康管理の方法や保健行動の様式の変化など、社会の変化に合わせ、人々の健康課題を根拠に基づいて予測、明確化し、人々と環境に働きかける活動展開の基礎となる知識や思考力、実践力を教授したいと考えている。

保健師という仕事のやりがいを自身の経験もふまえて伝えていきたい。

3. 方法

公衆衛生看護学概論では、理論などの知識を学ぶ際も学生の生活経験と結びつけて考えることができるよう、Google Form 等を利用した授業内アンケートを実施する等の工夫をした。公衆衛生看護活動論では、各ライフステージおよび特定の健康課題に応じた法制度と保健活動について知識を整理しながら学修できるよう、PPの資料だけでなく要点をまとめた配布資料を作成した他、知識の定着を確認するための小テストを実施した。公衆衛生看護活動論演習では、学生が主体的かつスムーズに個人ワークに取り組むことができるよう各種統計情報サイトとリンクさせた「地域診断演習ノート」を作成した。また、情報の統合にラベルワークの手法を取り入れた他、地区視診のまとめにフォトボイスの手法を取り入れた。

4. 成果

講義科目では、授業内容についての一定の理解を図ることはできたと考えるが、学生が主体的に考える時間が相対的に少なかった。また、タイムリーなリアクションペーパーの確認ができず、学生の気づきを全体に共有し学びを深めるような働きかけができなかった。演習科目では、教員一人あたりが担当するグループ数が多く、適切なタイミングでの助言ができないが多かった。また、教員間での打合せが十分だったとは言い難く、指示や助言の一貫性に欠ける部分があったと考える。学修効果を高めるため、新たな手法を取り入れながら進めているが、成果の検証が不十分である点も課題と言える。

5. 改善

講義科目では、授業毎のリアクションペーパーの確認を十分に行い、学生のレディネスや受け止めにふまえた内容にしていく。事例を取り入れ、学生間のバズセッションの時間をより多く設けることで、学生が能動的に考えられるような構成にしていく。演習科目では、ワークの進め方や到達点をあらかじめイメージできるよう、具体的でわかりやすい説明を心がける。そのためには、担当教員間での事前の打合せも十分に行うようにする。4年次の公衆衛生看護総合演習では、実習での地域診断と連動させた保健活動の事業化を行うが、枠組みとしてプリシード・プロシードモデルを取り入れることで、一連の思考プロセスをわかりやすく示す工夫を行う。また、演習科目における学修成果の可視化をしていきたいと考える。

6. 教育活動

アドバイザーにとって身近で安心できる存在になれるよう心がけたい。保健師課程としては、特に保健師としての就職を検討している学生への定期的な面談を行い、安心して採用試験に臨めるよう支援していく。

氏名 長峰伸治

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
心理学	139	心理学	47
養護実習事前事後指導	18	養護実習 I	6
養護実習 II	12	教育心理学	20
生涯発達心理学	158	教育相談の理論と方法	10
学校体験活動	9	生涯発達心理学	17

2. 理念

心理学関係の科目を担当しています。

対人援助職に就こうとしている学生の皆さんに「人間の心」や「自分や他人を理解すること」に興味・関心を持ってもらいたい、

また、講義内容を自分や身の周りの人達に照らし合わせて理解してもらいたい、と思って授業をしています。

仕事に限らず、今後歩んでいく人生のところで、心理学の知識が皆さんに役に立ってもらえれば、と思います。

3. 方法

大人数の一斉講義を行うことが多いのですが、スライドと手元の資料、視聴覚教材を基に、できるだけ一方的にならないように、

考えるワークを入れたり、クリッカー機能を使って設問に答えてもらったりしています。

少人数の科目では、実際にロールプレイをしたり、グループで事例検討をしてもらったりして、アクティブラーニングを心掛けています。

4. 成果

授業評価では、全体として比較的肯定的な評価をしていただいておりますが、授業中居眠りをしている人も見かけますので、

もっと興味・関心をもてるような授業内容・構成を心掛けたいと思います。

5. 改善

大人数の講義でも、こちらが一方的に話し続けるのではなく、問いかけをして考えてもらったり、近くの席の人と話してもらったりする機会を多くしようと思っています。

6. 教育活動

養護教諭課程領域長、学生委員長

氏名 熊澤武志

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
生物学	92	生物学	5
医療法学	14	生命科学	11
生理学 I	158	生理学 II	158
栄養生化学	160		

2. 理念

生理学・生化学関連科目（生理学 I、生理学 II、栄養生化学、生命科学、生物学）では、ヒトの生命現象をはじめ聞く言葉で理解しなければならないことが多かったり、これまでの知識を詳細化したりすることが少なくない。このような授業では、学生の向上心を維持し、目標を失わないようにすることが大切である。どうしてこの学びが必要なのか？なぜ今学ぶのか？が理解できるように、授業では教科書、配布資料、スライドなどを交えて説明するようにしており、学生がこれらの科目を学ぶ意義を実感し、目標を明確にできるようにしている。

医療法学では、なぜ看護で法律が必要なのか？なぜ法律を学ぶ必要があるのか？を法律事例を紹介しながら学生に学ぶ意義を実感してもらい、将来、医療従事者として働くために必要な法的知識に馴染みやすい環境を設定している。

3. 方法

担当する全ての科目について、自作の配布資料を用意するほか、授業内では、教科書あるいはスライドを用意するなど、事前学修や事後学修に役立つように、あるいは授業内容を視覚的に理解しやすいような工夫を行い、学生の理解を深められるようにしている。また、必修科目の生理学と栄養生化学、選択科目の生命科学と生物学では、小テストの実施や整理問題などを提示しており、学生の理解が深まるようなしくみを作っている。さらに、医療法学では、5名の実務家教員（4名は学外講師）によるオムニバス形式の授業を展開することで、学生に臨場感ある授業と興味深さを並行して体験できるように工夫している。一方、WebClass を利用したりアクションペーパーの提出によって、学生の授業の振り返りができ

るようにしている。

4. 成果

生理学・生化学関連科目では、配布資料、小テスト、整理問題などが事前学修や事後学修に役立つものとして学生から好評価を受けた。また、医療法学では、難しく感じる法学の授業が親近感をもって勉強することができ、とても理解しやすかったとの意見が多くあった。

5. 改善

生理学・生化学関連科目では、80分授業内での進行方法を学生の進度に合わせる工夫を行った。また、生理学や栄養生化学では、グループワークを実施する等のアクティブラーニングを取り入れた。一方、小テストの模範解答はWebClassにその日の内に掲載する方法を取り、事後学修に役立つように改善した。

6. 教育活動

ハンドベルサークルの顧問を担当している。

氏名 西川浩昭

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
疫学（BClass・2021年度入学生）	152	公衆衛生学	159
保健医療行政論	158	統計学・疫学概論	30
公衆衛生学	33		

2. 理念

内容や数値の変化が多い科目を担当しているので、なるべく最新の情報を提供する様に心がけている

3. 方法

授業内容に沿った配布資料を作成し、スライドに示した内容の要点を提供して、スライドの内容を書き写す必要が無いように配慮している

4. 成果

成績はほぼ横ばいであるが、重要な点については、身につけることが出来ていると感じている。

5. 改善

復習が重要と考えており、何をすれば良いか判らない学生が少なくないので、重要な点を問題形式で提示し、解答することで復習できるようにしている。

6. 教育活動

看護学部 18 グループのアドバイザー

氏名 安田智洋

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
健康スポーツ論	55	健康スポーツ実践	25
スポーツ I (月 1)	40	スポーツ I (火 1)	39
健康スポーツ論	31	健康スポーツ実践	32
スポーツ I (月 1)	32	スポーツ I (火 1)	34

2. 理念

隣人愛を実施するためにも、まずは自分が健康でなければならないと考えています。

まずは、講義・実践などを通じて、健康づくりを心がけ、その上で他者を大切にすることの大切さも学んでください。

3. 方法

講義では、最新の研究成果などをもとに、健康づくりや適切なスポーツの手法を学んでいただきます。

実践では、他者との協力（実験やスポーツ実技）のもと、心身ともに健康でいられる方法について、学修していただきます。

4. 成果

授業評価は講義・実技とも 3.6 以上の平均値となっていたことから、履修者から教員の意図が伝わっていることを感じました。

学生の健康・スポーツに対する取り組みが向上したと考えられます。

5. 改善

COVID-19 が 5 類に移行したことにより、マスク着用は任意といたしました。スポーツ実技は心拍数が急上昇するなど呼吸に及ぼす影響も高いことから、現在はマスク着用による不利益を被らないようにしています。

また、抽選する授業（履修希望者が上限を上回る場合に実施）への救済処置として、授業

における受講者数を増加させ、可能な限り受講できる学生の要望に答えるようにしました。

GPA がやや低い結果だったことを踏まえ、学生によりわかりやすく受講しやすい問いを設定し直すようにしました。

6. 教育活動

アドバイザー

氏名 炭谷正太郎

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
基礎看護技術Ⅳ	159	基礎看護学実習Ⅱ	158
聖隷看護基盤実習	158		

2. 理念

私は本学の看護学部を卒業し、精神科と救命救急センターの看護師として勤めたあと、本学の大学院（博士前期、後期課程）を修了しました。

建学の精神や聖隷の理念について聖隷ゆかりの施設に赴き、体験し理解を深めてゆく実習「聖隷看護基盤実習」が、2022年度から新カリキュラムとしてスタートしました。また、2025年度から4年次生が対象の聖隷看護探求実習が始まる予定で、これらの科目の科目責任者として立ち上げに携わっています。弱い立場にある人へどのように向き合うのか、対人援助職としてのあり方など学生と一緒に考えていきたいと思っています。

また、基礎看護学領域の教員として、患者に貢献するための基本的な看護技術を学ぶ講義、演習、実習を担当しています。

患者をとりまく療養環境は必ずしも生活者の視点から整えられているとは限らず、我慢を強いる場面も少なくありません。創造性を発揮して、患者にとってよりよい生活を適える環境づくりに貢献したいと考えています。

3. 方法

聖隷ゆかりの13カ所におよぶ福祉施設や病院への臨地実習を基に、聖隷看護基盤実習や聖隷看護探求実習は計画されています。

2年次生対象の基礎看護学実習Ⅱでは、臨地実習の前に、看護に求められる基本的な態度や看護技術が備わっているか確認するためのOSCE（客観的臨床能力試験）を実施しています。

また、OSCEを実施するため、患者役となって演技する「模擬患者」の養成をしています。

2024 年度第 15 回せいい看護学会学術集会のワークショップ「未来の療養環境を考えよう！デザイン思考で紡ぐ 看護 x デザイン ワークショップ」を主催します。

4. 成果

聖隷看護基盤実習は始まって 3 年目となり、来年に聖隷看護探求実習が開始されます。

聖隷ゆかりの施設における創設期からの歴史的な変遷や活動を知ることができたり、建学の精神や聖隷の理念について考え、意見を交わすことができています。

本学の同窓会などと連携し、OSCE やシミュレーション演習のための模擬患者を募集し、30 名以上を養成しています。

5. 改善

基礎看護技術を培うために、視覚教材の活用やシミュレーション教育の手法を取り入れ、授業・演習を改善しています。

また、セルフトレーニンググループの整備、シミュレーション教育演習を適える環境を整えることを、シミュレーション教育委員会副委員長として取り組んでいます。

2024 年度第 15 回せいい看護学会学術集会のワークショップでは、看護師、看護学部の学生、デザイン学部の学生などがグループになって力をあわせ、患者が抱く生活者としての困りごとを解決するための療養環境のアイデアを考えます。

6. 教育活動

療養環境をより良くする物作りの企業、病院、大学から成る「看護の困りごと解決にむけたネットワーク」に参加しています。アイデアワークショップのアドバイザーなど、療養環境をより良くするアイデア創出のための協力をしています。

グローバル教育推進委員として、海外研修のためのプログラムや環境づくりを担当しています。

氏名 田口実里

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
基礎看護技術 I	158	基礎看護技術 II	157

2. 理念

・学生は専門職者へと移行する最初の段階であるため、普段の日常と関連させ、分かりやすさ、イメージのしやすさを心がけている。特に医療環境の状況はイメージがしづらいため、日常と置き換えるか、イメージしやすい設問を設定し、理解しなければならない点を強調するようにしている。そのためにドラマ等でも画像等でもわかりやすいものやエピソードは活用するようにしている。

・学生は成人学習者であることを意識し、主体的に学ぶものとして学修内容を設定している。

3. 方法

・講義のレジメ、演習計画書、演習ノートを用いて、講義で学んだ単元内容を翌週には自己学修も踏まえて演習で実践し、体得できるような構成を取っている。

・パワーポイントは見やすいようにフォントや色調を調整している。一方的な授業は飽きてくるため、学生が参加したり、ディスカッションできる要素を取り入れ、理解が深まるようにしている。

・2クラスに分かれて実施する場合でも、双方向性を保ち、反対側にも教員をたて、学生の主体性を保てるようにしている。

・基礎看護技術 I、基礎看護技術 II ともに技術確認項目があるため、技術習得のためのセルフトレーニングの際に教員の指導が必要な場合は指導し、技術の修得がしっかりできるようフォローしている。

4. 成果

・基礎看護技術Ⅰは1年次に修得すべき基礎看護技術の中でも土台となる感染防止技術や安全、コミュニケーション、バイタルサイン測定が中心となる。個人で取得すべき項目から、患者に実施するものへ広がるタイミングのものが中心となる。一方、基礎看護技術Ⅱは日常生活援助を全体的に網羅するため、基礎看護技術Ⅰで修得したものを土台として一つ一つの手技の手順が複雑となったり、複数の技術を組み合わせて行うものとなるため、知識と技術の両方を修得していかなければならないことから、ややGPAが低下する傾向にある。

・技術確認の項目となっている技術はセルフトレーニングを重ね、その際に指導も行い、全員が修得できている。

5. 改善

・1年次に修得した基礎看護技術の技術項目が基礎看護学実習Ⅰ、2年次のOSCEなどで用いられることから、2年次生で修得があまりできていない、不得手な内容がもっと分かりやすくなるよう、授業のレジメ、演習の構成、演習ノートに反映する。

・資料に用いる図やグラフは、分かりやすいものがあつた場合は刷新し、見やすい構成に変更している。

6. 教育活動

・アドバイザー

氏名 乾友紀

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
成人看護援助論演習	152		

2. 理念

科目名：成人看護援助論演習（科目責任者）

本科目は、3年次春semesterに開講され、秋semesterからの臨地実習を見据えた、看護を実践するための重要な位置づけにある演習である。

学生が、これまで学んできた知識や技術を活用し、学修を主体的に進め、積極的な取り組みができるように教授活動を行うことを理念としている。

成人看護学の教員ほぼ全員が関係する授業科目であるため、教員の意思疎通や連携を図り、学生に公平な授業の質の担保ができるように努めている。

3. 方法

12コマを看護過程演習として、3コマを看護技術演習として構成している。

<看護過程演習>

アクティブラーニングを主体とし、講義と協働学修を組み合わせて構成している。成人看護学における慢性領域・急性期領域の患者事例を各々提示し、周辺領域の自己学修を推進させ、第2回にミニテストによって知識の確認を行っている。

その後、慢性領域の事例を担当する3グループ、急性期領域の事例を担当する3グループ（1グループ30名弱）に分け、患者事例における看護過程の展開を協働学修によって進める。協働学修には、think-pair-share、ポスターツアーなどの手法を取り入れている。最後に、それぞれが担当した領域の事例について、看護過程の展開内容を担当していなかった学生らへプレゼンテーションし、学修内容を共有している。

<看護技術演習> 「ME 機器の基礎と管理」について、1コマ講義した後に、80名程度

の2クラスに分け、技術演習（輸液管理、輸液ポンプの扱い、シリンジポンプの扱い、心電図モニターの扱い）を2コマ実施している。評価は、授業への参加度や各演習レポートとし、ルーブリック評価を取り入れ、学生自身が自己評価できるようにしている。

4. 成果

学生の授業評価では、93名の回答があり、「この授業に意欲的に取り組みましたか」、「この授業の目標を達成することができましたか」の質問項目では、すべての回答者が「そう思う」または「ややそう思う」への回答であった。

課題が多く、学生への負担は大きかったが、実習前に看護過程の展開を学ぶ非常に重要な位置づけである科目として、学生が意識し、真剣な取り組みができていた。

自由回答では「自分の知識が広がった」、「小規模の授業であり、先生にも質問しやすく、とてもやりやすかった。」「グループワークでたくさん意見交換ができ、考えが深まった。」「自分が学ぶ責任感と分からないところは教えてもらえる安心がありやりやすかった。」など肯定的な意見が挙がり、質的にも概ね良好な反応や成果が得られたと考えられる。

また、GPA平均は2.95であり、前年度2.89からやや上昇し、全体として概ね良い成果が得られたと考えられる。

5. 改善

学生からの意見としては、課題が多いことや、グループワークへの貢献度が評価されない、などが挙げられた。

アクティブラーニングならではの課題があるが、今後学生個々の参加度を高め、学修成果が相乗的に得られるように工夫をしていきたい。

また、今後、領域実習の中で看護過程の展開における理解度をさらに評価していくとともに、実習の成果が得られているかも確認していきたい。

旧カリキュラムでは、本科目は今年度最後になるが、この授業で培った効果的な手法を今後の授業にも活かしていきたいと考えている。

6. 教育活動

本科目以外の担当授業（学部）

成人看護学概論、成人看護援助論Ⅰ、成人看護援助論Ⅱ、急性期看護学実習、統合実習（急性期）、看護研究、看護研究Ⅱ、聖隷看護基盤実習

アドバイザー担当学生：16名、履修支援・学修支援に関する活動

氏名 木村暢男

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
老年看護援助論Ⅱ	152	看護統合セミナー（老年看護学）	54
統合実習（老年看護学）	19		

2. 理念

教員が実践している教育を学生が理解できているのか、疑問に思っていることはないのか等を、学生とのコミュニケーションにより把握しながら、できる限り学生が「わかった」、「できるようになった」と思える教育をしていきたいと思えます。特に、教科書を読んでも理解できないような概念や理論等を、学生とコミュニケーションを取りながら、分かりやすく解説していきたいと考えています。その中で、学生が看護の勉強をする「楽しさ」に目覚め、主体的な勉強を後押ししていきたいと思えます。

3. 方法

学生とのコミュニケーションを重視していきたいと思えます。特に、演習や実習指導において、学生が理解できないこと、どのようにしたらよいかわからないこと等を、コミュニケーションを通して把握し、授業で行ってきた勉強等を振り返りながら理解を促すと共に、学生が困っていることを解消していきたいと思えます。そのために、教員からは、学生と頻繁にコミュニケーションを取ると共に、学生が教員に相談しやすい環境や雰囲気を整えていきたいと思えます。また、学生ができていないことは積極的に認め、励ましながら、学生の学ぶ意欲を引き出していきたいと思えます。

4. 成果

演習やグループワークにおいて、随時、学生の進捗状況を把握し、学生が理解できていない部分が理解できるような教育を行う努力を続けてきました。特に、老年看護援助論Ⅱの看護過程の演習においては、学生が躓いている部分を把握し、フィードバックを行うことによ

り、それを老年看護学実習Ⅱにおける看護過程の展開につなげていけるように支援しました。老年看護学実習Ⅱにおいては、その老年看護援助論Ⅱの看護過程の演習における理解を基に、学生の主体的な高齢者との関りを支援し、何を目的として実習を行っているのかを確認しながら、日々の実習指導を行ってきました。日々の実習指導において、学生と密にコミュニケーションを取り、学生の進捗状況を日々確認しながら、学生のレディネスに合わせた個別の指導を心がけました。学生は実習を通して、施設で生活する高齢者の身体状態や認知機能に合わせた、「その人らしい生活」の支援を学ぶことができたのではないかと考えています。

5. 改善

実習を行う学生の中には、対象者の方の身体的状態や認知機能を、なぜ細かく分析しなくてはいけないのかを理解することが難しい方や、分析の方法がわからない方もいらっしゃると思います。学生が自分の行っていることが、何のために行っているのか、そしてどのように行ったらよいかを理解した上で実習に取り組めるように、目の前の現象だけではなく、基本的な看護の考え方やアセスメント方法を、基本に戻って学生と一緒に考えていく必要性を感じています。学生が理解できない時や、どのように進めたらよいか困っている時は、基本に戻って理解を促していきたいと思っています。

6. 教育活動

アドバイザーの役割として、常に学生に心を開き、いつでも学生が相談できる環境を整えていく必要性を感じています。地域実践に関しては、10月に北部協働センターにおいて、4年生に認知症予防講座を行ってもらい、地域在住の31人の高齢者の方々の認知症予防に貢献できたかと思っています。4年生にとっても、元気な高齢者に対する認知症予防の意義を学ぶ、よい機会になったと考えていますので、今後も毎年行っていきたいと思っています。6月にはアメリカからの留学生を迎え、日本の看護や医療そして介護を学ぶ環境を提供できたかと思っています。また、4年生に対しては、3月～5月にかけて就職活動の履歴書作りや面接練習を行い、希望する就職先の内定の確保に向けて支援をしてきました。国家試験対策に関しては、特に、10月からは模擬試験の成績不良者に対して個別の面談により、成績改善のための指導を行ってまいりました。

氏名 内藤智義

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

2023年度は科目責任者として担当する科目無し

2. 理念

・認知症の高齢者が「その人らしく、心地よく排泄する」ことを支えるケアをめざし、使命感をもって研究している。研究成果は担当する講義・演習・実習を通じて看護教育に還元していく。さらに超高齢社会の我が国を支える役割を担う学生の皆さんに、老年看護の魅力・やりがいを伝えられるように努めていく。

3. 方法

・老年看護援助論演習では、高齢者が疾患・障害を持ちながらも、その人らしく生活を営むことができるよう ICF（国際生活機能分類）の生活機能モデルなどから目標志向型思考で課題を抽出する看護過程の展開を学修できるよう授業を構築している。さらに、高齢者疑似体験演習・立案した看護計画の実践を通して、高齢者理解を深め高齢者の特徴に合わせた援助技術を習得し、老年看護学実習の準備を整えることができるよう工夫している。

・開発した教材：看護学生及び臨床看護師を対象にした「本人の視点から学ぶ高齢者援助」の原案を担当し、医学映像教育センターと DVD を作成した。老年・在宅看護領域間で膀胱に対するポータブルエコーを用いたシミュレーション教育方法を作成し、演習に導入している。看護学生に対する教育効果については前向きコホート研究により評価済みであり、今後は学会及び論文にて公表する予定。

4. 成果

・2024年度の GPA や授業評価の結果が出てから考察する予定。既に履修を終えた複数の学生へのインタビューでは、老年看護過程の展開が分かりやすかった、老年看護実習にすぐ役立つ内容であった、ポータブルエコーなど最新の知識・技術が学べてよかったと概ね良好な評価を得ている。

5. 改善

・2024年度の GPA や授業評価の結果が出てから分析し、学生の希望・要望に応えられる改善をしていく予定。

・既に開発した教材（本人の視点から学ぶ高齢者援助に関する DVD、膀胱へのポータブルエコーを用いたシミュレーション演習）の評価を継続的に実施していく。

・今後は学生が実際の高齢者と接してリアリティある看護技術体験ができるように、地域在住高齢者を教育ボランティアとして募集したヘルスアセスメント演習かつ、治療・療養支援看護領域（老年、成人（急性期・慢性期）、在宅看護領域間）で共同して教育指導できる演習内容の企画・運営を目指す。

6. 教育活動

・アドバイザー教員として、充実した大学生活を過ごし、ディプロマ・ポリシーに到達し卒業できるように学修指導をしている。

・課外活動：「気持ちよく出すことを叶える排泄ケア」の看護教育導入プロジェクトリーダーを担当している。全国の複数大学の看護教員とともに、正確な知識にもとづいた気持ちよく出すことを叶える排泄ケアの浸透のため、看護教育における現状と課題を明らかにした上で、モデル案の作成を目指し活動している。

氏名 小出扶美子

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護統合セミナー（小児看護学）	57	統合実習（小児看護学）	19

2. 理念

小児看護の面白さと難しさを実感できるように講義を行い、実習でも学生に対して丁寧に、誠実に対応する

3. 方法

講義の要点がわかるように講義し、講義後の自己学修につなげていく。

講義では小児看護に関する問いをつくることで、小児看護の難しさや看護の方法の工夫などを考えるきっかけをつくり、小児看護に対する理解を深める。

4. 成果

今年度は座学での講義科目の科目責任となった科目はなかったが、担当した科目ではおおむね成果をあげることができた。

実習、統合実習も同様である。

5. 改善

講義科目では一方的な講義となりやすいため、短時間のグループワークを取り入れるなど講義の構成を工夫していきたい。

6. 教育活動

アドバイザーとして、学習面だけでなく大学生活を楽しんで送ることができるようにサポートしていく。

実習では、国試対策にもつながるように、既存の学習した知識と看護をつなげていくように学習を促していく。

氏名 黒野智子

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
母性看護援助論Ⅱ	152		

2. 理念

- ① 建学の精神である『生命の尊厳と隣人愛』の基、労をいとわず対象者に寄り添って看護援助を立案し実施できるようにすることを考えることができる。
- ② 主体的に学ぼうとする姿勢を培う。
- ③ 現象の「なぜ?」「なに?」を追求しようとする姿勢を養う
- ④ 「感じたこと」「考えたこと」を自分の言葉で表現し、伝え合うことができる。
- ⑤ 施設内だけではなく地域で働く看護専門職の助産師の責任と役割、その魅力を知る機会を提供する。

3. 方法

- ①できるだけ2クラスに分け、直接対面で授業を行う。また、演習は3クラスに分けて、全員が体験できるように可能な範囲で少人数で実施。
- ②事例を動画で示し、その状況をイメージして、学生が対象者に共感し寄り添いやすくした上で、客観的なデータを提示して考えさせている。
- ③グループワークを取り入れ、お互いに「なぜ?」「なに?」「感じたこと」「考えたこと」を話し合える機会をつくっている。
- ④ゲストスピーカーとして、開業助産師の活動や体験した事例についてインタビューする機会を持つ。
- ⑤考えた看護計画をロールプレイしてみる。

4. 成果

GPA の平均は、2.96 であり、授業評価はもそれなりの評価を得ている。
一貫した事例を使用して、わかりやすかったとの評価もあった。

5. 改善

昨年同様、内容が盛りだくさんなことも有り、じっくりと課題に取り組む時間を提供することができないこともあり、学生の個々の意見を生かすことができないこともあった。

焦点を絞り、効果的な事前課題を取り入れるような改善が必要。

6. 教育活動

・地域アクティブラーニングでおこなっている SGE（子宮頸がんワクチンやブレストアウェアネスの婦人科啓発活動）の取り組みを授業とコラボして、ウィメンズヘルスの授業の中で発表の機会をつくるなどしている。また、オープンキャンパスや学外での取り組みを学生が行っているのを支援している。

- ・アドバイザー学生の相談に応じている。
- ・学生委員会の副委員長として、アドバイザーの先生の相談に乗っている。

氏名 神崎江利子

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護統合セミナー（母性看護学）	57	統合実習（母性看護学）	19

2. 理念

統合実習・統合セミナーで、以下のことが身に付けられるよう支援していきたいと思いま
す

★主体的に学ぼうとする力を身につける。

・自ら学ぶ力を身につける。そのためには、まずは自分で考え、行動する。

自分にできること、できないこと、わかること、わからないことを知り、今の自分が理
解できる。

・興味・関心を持つ → 自分で調べる → わかる（イメージできる）⇒ 楽しい・
嬉しい・学ぶ喜びにつながる ことを知ってほしい。

★自ら進んで労を厭わず多面的な経験をして学んで欲しい（機会があれば多くのことに
チャレンジしてほしい）。

★自分の考えや意見を自分の言葉で他者に伝えられる。

・事前学習（課題）で取り組んだ内容を基にグループワークやディスカッションにおい
て自分の考えや意見を自分の言葉でわかりやすく伝えられる。

・コミュニケーション能力を身につけてほしい。

★主体的に実習を調整することができる。

・自分達で統合実習を組み立てているという気持ちで臨む。

・自分の実習テーマや学びたいこと、取り組んでみたい（深めたい）ことを実習指導者
にわかりやすく伝え、交渉（相談・調整）する力を身につける。

★相手に寄り添う援助について考えることができる。

・できれば援助を実施して欲しいですが、相手のことを考え実施しないことを選択もして欲しい

★対象や周囲の状況を判断しながら、タイミングよく行動できる（自分の行動を調整できる）。

・援助を実施する際には、自分の都合だけではなく、対象や周囲の状況をよく理解し、タイミングを見極めたうえで行動できる（適切な時に看護援助を実施する）ようになって欲しい。

・臨床で遭遇する複雑な状況下(複数受け持ち、優先順位)での判断能力を育成して欲しい。

★自分の心身の健康が維持できる。

これも一緒にお伝えしたいと思います！

☆助産師の役割や魅力について紹介する。

・施設や地域で母子に関わる助産師の役割や魅力を伝える。

3. 方法

★実習前

・統合実習で学びを深めたいテーマを決める。

・統合実習でテーマを学ぶための、実習計画書を作成する。

統合実習に向けて、テーマについての文献検討をおこない、統合実習計画書を作成する（統合実習のテーマ、実習目標、実施したいこと、課題を明確にする）

・実習場所の決定

★統合実習：総合病院や助産院、地域での子育て支援ひろばでの実習を通して、以下のことにチャレンジしてもらいました。

皆さん、楽しそうに実習に取り組んでいました！

・実習初日に実習指導者および実習メンバーに統合実習計画書を発表する。

・複数の母子または妊婦、ハイリスク児を可能ならば受け持つ。シャドーイング実習でも、自分ができるケアは実施する。

・対象者の昼間だけではなく夜間の生活とそのニーズを理解し、看護援助を実施する。

・相手に寄り添う援助について考えながら、母子または妊婦、ハイリスク児とその家族に必要な看護技術を提供する。

・臨床で遭遇するやや複雑な状況下（複数受け持ちなど）で、優先順位を考えながら、タイムマネジメントをおこなって看護援助を提供する。

・自分の力量(実践能力)を見極めて、対象に適した看護援助をタイミングよく実施する。

・対象に必要な個別性を考慮した保健指導案を立案する。

・地域でおこなわれている子育て支援や産後ケアなどに参加し、継続看護について考える。

- ・女性のライフサイクルにおける継続看護について考える。

★実習後

- ・課題レポートを作成する。
- ・統合実習で学んだことを通して、看護職としての自己の目標や課題を明確にできる。
- ・課題レポートを基に自分が実施した統合実習の成果について、実習指導者とグループメンバーに報告し、コメントをもらう。

4. 成果

- ・学生からの授業評価アンケートでは、比較的高い評価を得ている。
- ・自由記載に「自分が学びたいこと、やりたいことが、実習を通して学ぶことができた」という意見があった。

5. 改善

- ・自信をもって看護技術が提供できるよう、実習で活用する技術（バイタルサイン測定、腹囲・子宮底測定、レオポルド触診法、沐浴等）を学内でトレーニングできるように環境を整備する。
- ・ICT教材を紹介し、画像からイメージできるようにする。

6. 教育活動

- ・助産師を目指す学生の進路相談おこなっている。
 - ・アドバイザー学生の相談に対応する。
 - ・地域で開催している孫育てセミナーに立ち上げから参加し、企画・運営に携わっている。
- 学生も活動と一緒に参加できるよう、臨地看護実習の一環として取り組んでおり、病院のみならず地域における母子や家族への支援に着目してもらい、地域での母子保健活動を担う人材を育成していく。
- ・看護師国家試験対策として勉強会を実施した。

氏名 室加千佳

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護研究Ⅱ（母性看護学）	8		

2. 理念

私が最も大切にしている教育の理念は「主体性をもち行動化すること」である。そのために、講義・実習にて教授する過程で大切にしていることは、学生が興味を持って、講義・実習に参加し、看護の楽しさを実感できることを心掛けている。さらに、学生が「論理的な思考力」「自主性」「コミュニケーション能力」を身に着けることを重視している。これらの能力は、看護の分野で、活躍・貢献するうえで必要となる能力であると考えているからである。これらの能力を大学生活において身に着け、社会に貢献し、人の役に立つことを喜びと感じられるような人材に成長して欲しい。

3. 方法

母性看護学概論では、胎児を人としてみなすかという看護者に直面する事例を基に、生命倫理感について話し合いを行い、学生が意見を述べるように設定した。

母性看護援助論Ⅰ・母性看護援助論Ⅱでは演習に力を入れ、新生児・早産児のケアを360度カメラにて視覚化し、知識のみでなく、多面的思考を養い、実践・行動化できるまでを到達目標とした。

母性看護学実習では、早産児高機能シミュレータを用い、思考の可視化、看護判断を、実践・行動化できるシミュレーション演習を展開した。

看護研究Ⅱでは、研究計画書の作成のみならず、ステップアップしたい学生には、一緒に学会参加を行い、学会の雰囲気や方法を学ぶ機会を設けた。

4. 成果

早産児高機能シミュレータを用いた演習では、約9割の学生が「早産児の看護についての理解を深めることができた」と評価し、「ケアの必要性を可視化できたことで、知識・技術が定着したと思う」との感想が得られた。

看護研究Ⅱの中で、学会参加を2名の学生と共に実施した。

5. 改善

新カリキュラムが本格運用するため、さらに、学生の思考の可視化・統合化、看護実践の行動化を高める教材を開発したいと考えている。

また、聖隷看護基盤実習において、初学年教育の充実を図りたい。

6. 教育活動

アドバイザーとして、アドバイザーの相談に乗り、心身フォローを実施している。

学生オープンキャンパス企画委員のサポート役として会議に出席し、企画調整している。

氏名 小平朋江

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護統合セミナー（精神看護学）	51	統合実習（精神看護学）	19

2. 理念

建学の精神である隣人愛に基づく「ともに生きる」を看護学を通して学ぶ。

3. 方法

「ナラティブ教材」を教育的に活用する。

4. 成果

「ナラティブ教材」の教育的活用は、理念で述べた「ともに生きる」を具現化したものであり、学生と共有しやすい。

5. 改善

「ナラティブ教材」の教育的活用の洗練と発展。

6. 教育活動

アドバイザーとして個々の学生への支援。

氏名 清水隆裕

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
地域ケア連携の基礎	351	精神看護援助論Ⅱ	152
精神看護学実習	46	精神看護学実習	154

2. 理念

精神看護学領域の教員です。こころのケアは、まず相手のこころを癒す以前に、「ケア者一患者」という枠組みから「人間一人間」の枠組みに移行する必要があります。そのためには、自分も病人もお互い弱さを抱えた人間であるという自覚が大切です。自分の弱さを認めるには大変な苦悩が伴いますが、それを受け入れることが愛するということであると考えています。

3. 方法

精神看護援助論Ⅱでは精神力動論を基礎に授業を行っています。精神看護学実習では、こころのケア以前に患者さんと人間同士で関われることを重視しています。自分が専門職者以前に弱さを抱えた人間であることを安全に受け入れるツールとして視覚教材を開発して用いています。

4. 成果

こころの病は誰もがなりうる可能性があるが、その反面自分と連続線上にあることは実感することは難しい。そのため、精神看護援助論Ⅱで平均3.5だったことは高い値であると考えている。

5. 改善

精神看護学実習において視覚教材を用いているが、その反応は各学生によってまちまちである。特に、弱さを受け入れることだけが良いことであると捉えられる場合があるため、

その点は注意していく伝えていく必要があると考えています。

6. 教育活動

アドバイザー、軽音部サークル顧問、看護学部 SSN チーム（広報活動）担当

氏名 隆朋也

職位 講師

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
情報処理(月6・隆)	35	情報処理(月5・隆)	32
情報処理(火1・隆)	50	情報処理	10
データサイエンス入門(看護A①)	40	データサイエンス入門(看護B①)	39
データサイエンス入門(SW)	51	データサイエンス入門(OT)	22
基礎演習	158	保健統計学	159

2. 理念

なるべくわかりやすく、出来るだけ正確に、を心がけています。

3. 方法

毎回の授業でリアクションペーパーに入力された理解度や関心度を確認し、次回授業の難易度設定や授業の展開方法に反映させています。

4. 成果

授業評価アンケートでは、おおむね良好な結果が得られていると受け止めています。

5. 改善

リアクションペーパーに関する全体へのフィードバックが不足していると感じています。なるべく授業内に時間を確保して伝えるよう取り組みます。

6. 教育活動

氏名 早川ゆかり

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

2023年度は科目責任者として担当する科目無し

2. 理念

看護専門職として必要不可欠な看護にまつわる考え方とその技術の基礎を、根拠を基にわかりやすくお伝えしたいと考えています。

3. 方法

学習者のレディネスに合わせて、講義、演習の組み立てを行っている。また、1つの単元が、事前課題・講義・演習・事後課題で成り立っているため、それらが順を追って、関連づいていくように心がけている。

実習に関しては、実習目標をふまえ、看護の現場で起きることを教材としながら学生に関わっていくように努めている。

4. 成果

学生のこれまでの日常生活から想起させる発問や、私の看護師としての体験を交えながらの具体的な説明は、状況が想起されやすいとの反応があった。

学生のレディネスを考慮することで、理解を促すことができたと考える。

5. 改善

教授内容の多い単元は、伝えたいことが多く、内容を欲張ってしまう傾向がある。そのため、授業スピードが後半速くなってしまうことがあった。

今後は、伝えたいことの必要十分をよく考え、シンプルに教授することを心がける。また、伝える方法として、学生同士のディスカッションからの気づきを促すなど、内容の工夫も心がけていく。

6. 教育活動

2023年度は、15名のアドバイザー学生を受けもった。

また、よさこい鯉蛇羅とマナの会のサークル顧問として、コロナ禍でも安全にかつ学生さんらしく活動できるように支援した。

氏名 有村優範

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

2023年度は科目責任者として担当する科目無し

2. 理念

看護学部在籍する学生に対し、看護専門職者となるために必要な基礎的知識や技術、態度を修得してもらうために、講義・演習・実習を展開している。

対象とする学習者は、成人学習者への過渡期であり、今後、医療・福祉を担う専門職者としての責務を果たす必要がある。そのためには、自ら課題を見つけ、能動的な学習が求められる。

学習者が自ら思考し、動機付けができるように学習環境や教材を提供し、成長を促す必要がある。

3. 方法

学習者のレディネスに合わせ、単元で修得すべき目標を明らかにし、事前、事後課題を含め、講義、演習、実習を通じて基礎的知識・技術の教授を行っている。

講義は、レジュメとPPTを用い、動画や写真を活用して、学習者が視覚的に理解できるような工夫を行っている。

また、一方的な教授活動にならないよう、内容に合わせたディスカッションを設けることにより、学習者が主体的に学び、考えを他者に伝える機会をつくっている。

演習では、講義で学習した内容を基に実践し、知識と技術が連結できるような事前・事後課題を課し、学習者の知識・技術の定着を図っている。

実習では、日々の講義、演習を統合しつつ、看護職としての考え方やあり方が身に着けられるように、場面を教材化し、学習者への支援を行っている。

4. 成果

動画教材や写真を用いた学習は、初学者にとって実際の理解に繋がるとの反応があった。

また、教授者自身の体験を混ぜることにより、よりリアリティを持って、学習の重要性を伝えることができたと考える。

5. 改善

教授内容が増えることにより、授業中の進行速度が速くなる時があった。

そのため、教授内容を厳選し、また、学習者の速度に合わせ、授業内容を構築する必要がある。

ある場面もあった。

6. 教育活動

2023年度は、15名のアドバイザー学生を受け持ち、大学生活や学習面におけるサポート、相談役を担った。

また、アドバイザー学生以外に対しても、就職支援活動や情報提供を行った。

授業の不明点や自己学習課題を求めた学生の指導を行い、技術試験に向けたセルフトレーニングの指導も併せて行った。

バトミントンサークル顧問として、コロナ禍でも安全に活動ができるよう、学生と協議を行った。

氏名 氏原恵子

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
急性期看護学実習	51	急性期看護学実習	154

2. 理念

急性期（周術期）にある患者とその家族の全体像を理解し、必要な看護実践を行うための知識・技術・態度の習得ができる。

適切な援助関係の構築・看護過程の展開・根拠に基づいた看護実践・責任ある実習態度による取り組みを目標とした。

3. 方法

実習に関連する成人系の講義・演習内容の復習、ワークブックによる事前学習を勧め、実習で活用できる知識とした。

学生カンファレンスや臨床におけるカンファレンスを充実させた。

4. 成果

患者の個別性を考慮した看護の重要性に気づき、患者を生活者として捉え、包括的・継続的な視点でセルフマネジメントを支援する看護について思考し、質の高い実習を実施できた。

学生の授業評価から多くの学生から実習目標が達成できたと評価された。

適切な援助関係構築に必要なコミュニケーション力、自律的学習能力や科学的看護思考力を高めることが課題である。

5. 改善

学生個々の学習状況を踏まえて、個別指導と集団指導を通して学生の学習効果を上げら

れるように支援する。

臨地における体験や見学を通して、看護職としての自らの将来を見据えて、自己の課題への気づきと改善ができるように支援する。

講義や演習で学習したことを実習において実践・体験することで、知識と体験がつながり、自らの看護実践について考察できるように支援する。

6. 教育活動

有志の学生とともにがん啓発活動を行っている（SGE-PJ）

アドバイザー学生への個別学習指導を行っている。

氏名 河野貴大

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
慢性看護学実習	51		

2. 理念

臨床現場で起こるさまざまな現象を教材化し、学生自身が興味をもって学修し続けられるように指導することを心掛けています。臨地実習では、将来看護師として働くうえで必要不可欠となる他者に自分の考えを伝える力や、自身の実践を文献と比較し省察する力を育むことができるように支援しています。学生が受け持ちの患者様に関心を寄せて関わるなかで、大切にしたいと思うこと、考えを尊重しながら、必要な看護を考え実践していくことができるようにサポートしていきたいと考えています。

3. 方法

慢性看護学実習では、「慢性疾患を抱える患者と家族を総合的に理解し、病いをもって生活することに対する看護実践に必要な知識・技術・態度を習得する」ことを目的に、以下①～⑤の目標を掲げ実施しています。

①慢性疾患が患者と家族の生活に与える影響を、身体的、心理的、及び社会的側面から総合的に捉えることができる。

②慢性疾患の特徴を理解し、長期的視点で必要な看護を理解できる。

③病いをもって生活する患者と家族の療養上の問題を抽出し、看護過程を展開できる。

④病いをもって生活する患者と家族が、自立した生活を送るための支援を理解し、看護を説明できる。

⑤慢性疾患看護の看護実践を通して、病いをもって生活することに対する看護者としての考えを深める。

臨地における実習期間は 8 日間とし、学生は臨地実習期間中に 1 名から最大 4 名の患者

を受け持ち、対象者の病態関連図・全体像・アセスメント、セルフマネジメントもしくは退院支援に焦点を当てた支援を含む看護計画の立案、実施、評価の一連の看護過程を展開します。主に病棟指導者、病棟課長、病棟スタッフ、実習担当教員が学生指導に関わり支援します。

4. 成果

学生は受け持ち患者に関する情報を意図的に収集し、病態関連図によって全体像を捉え、看護計画を立案し一部実践・評価することができています。受け持ち患者の状況によっては清拭、足浴をはじめとする清潔ケアや排泄ケア、移乗介助、簡易血糖測定等を実施する機会を得ることができ、患者の状況に合わせたケアについて病棟指導者や実習担当教員からフィードバックを得ることで学びを深めることができています。臨地実習後には学生が患者に実践した看護や患者の反応を振り返って言語化し、他者に伝えることで自身の思考を整理するとともに、文献と比較して考察することにより新たな課題に気づき学びを深めることができています。

5. 改善

学生が長期の実習に慣れておらず、身体的・精神的負担から臨地実習中に体調を崩してしまうこともあり、体調管理が課題であると考えています。教員が学生の体調管理状況を把握しながら学生が実習に安定して取り組んでいけるよう検討していきたいと思います。

6. 教育活動

アドバイザー

氏名 山崎淑恵

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護統合セミナー（慢性看護学）	75	統合実習（慢性看護学）	25

2. 理念

統合実習（成人・慢性看護学領域）における目標の概要は、「主体的な行動ができること、自分の力量を理解し、複数患者に対して根拠に基づいた安全性の高い看護の提供のための優先順位や時間管理を考慮した行動計画の立案・実施をすること、看護チームにおけるリーダー看護師やチームメンバーの役割を理解できること、自身の看護観を深めること」としています。

3. 方法

- ・2名の患者を受け持ち、病棟の看護計画のもとに援助を行います。
- ・2名の受け持ち患者に対して、優先順位を考えながら行動計画を立て看護を実施し、終了後に行動計画を振り返り翌日の実習に活かせるようにします。
- ・受け持ち患者への看護援助は基本的に病棟の臨床指導者の指導のもとで実施します。
- ・1病棟あたり学生2～3名を配置し、各教員は2～3病棟を巡回しながら指導を行いません。

4. 成果

学生は、病棟実習前の複数患者の受け持ちを想定した多重課題に関する学内演習において、根拠をもって優先順位を踏まえた行動計画を立案することの難しさを体験し、自分の力量を考えながら綿密に行動計画を立案する必要性に気づくことができました。学内演習での気づきや学びを病棟実習に活かそうとする姿勢が多くの学生にみられました。学生は病棟実習において、事前の行動計画の立案に加えて、時間管理をする複雑さや、急な変化に対

応するためのアセスメント、臨機応変な計画の変更・調整が必要であることを日々の実践の中で学びとっていました。さらに多職種と話し合う場面などから、看護師がベッドサイドで得た情報が、どのように共有・活用されているのか知ることができ、チームメンバーとしての役割を理解することにつながりました。

5. 改善

時間管理や多重課題のみならず、限られた時間の中で、慢性疾患を有する患者のセルフマネジメントを支援するための看護について考え実践できるようにしていきます。

6. 教育活動

アドバイザー活動, SGE-PJ

氏名 寺田康祐

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

2023年度は科目責任者として担当する科目無し

2. 理念

学生が思考していることを大切に、そこから看護への興味、意欲が持てるようにかかわり続ける。4年間の教育で学ぶことは多いですが、全てが看護師・保健師・養護教諭の道につながっていることを示しながら、将来についても考えられるように、看護を楽しみと思えるように学修をサポートしている。

3. 方法

講義・演習では、解剖整理や病理病態など基礎知識を大切にしながら、実際の現場（実習）で活用できる内容であることを意識している。

実習では、今後一生活用できる考え方、実践方法などを理解できる内容であることを意識している。

4. 成果

講義・演習で実習に向けた準備を行い、実習では学生が患者に対する看護実践を学修することができている。

5. 改善

学生がさらに看護に興味を持てるような講義内容、実習内容となるようにする。

6. 教育活動

アドバイザー活動

氏名 加藤貴子

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
老年看護学実習 II	58	老年看護学実習 II	153

2. 理念

高齢者施設で生活する高齢者の援助の実践を通して、高齢者看護に必要な基本的知識・技術・態度を身につける。

3. 方法

臨地実習にて対象者 1 名を受け持ち目標志向型思考にて看護過程を展開し実施評価を行う。実習施設の看護師のシャドーイングでは、施設の特徴と多職種連携、施設の中での看護師の役割について理解を深める。学内実習では高齢者疑似体験、食事栄養ケア、排泄ケアの演習を行う。これらより高齢者に関心を持ち、適切なコミュニケーションの方法、加齢による身体的・心理的变化及び社会的役割の変化や疾病や障害を持ちつつ自立を目指しながら生きる高齢者についての理解を深める。また、高齢者に対する尊厳ある態度を身につけ、老年観を発展させることができるように支援を行う。

4. 成果

対象者 1 名を受け持たせて頂くことで、高齢者とのコミュニケーションや加齢による変化、目標志向型思考の考えもと看護過程の展開を行うことができた。看護技術においては、施設でできる可能な範囲の中で実践（食事、排泄、入浴、リハビリテーション、余暇活動など）することができた。看護師のシャドーイングにより、施設の特徴や看護師の役割について深めることができた。

5. 改善

施設でのまとめ発表では、各グループの発表を行うのみであったため、今後は各グループの発表からどのようなことを学修したのかをさらに深めることが必要である。

6. 教育活動

臨地実習の中で高齢者との関わりを深めていかれるような実習内容を検討していく

氏名 山本智子

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
小児看護学実習	154	小児看護学実習（2023 春セメスタ ー）	46

2. 理念

本科目は「看護師」の実務経験を有する講師が実務の観点を踏まえて教授する科目であり、特に小児看護の専門性のある施設での実務経験を備えている。

生命の尊厳と隣人愛を基盤として、子どもとその家族への看護実践の思考過程が展開できるよう、実習環境を調整している。

いつでも学生が話しかけやすい環境作り、関係性の構築を心掛けている。

3. 方法

こども園（保育園）と病院（施設）との実習を組み合わせることで、様々な状況にある子どもの成長・発達、健康レベル（障がいレベル）を理解することができる方法をとっている。

小人数のグループ配置をし、臨地・臨床の指導者や教員がいつでもそばで関わられるよう、学生一人一人へきめ細やかな対応をしている。

カンファレンスを通して、お互いの学びを共有し、また知識の習得に結び付けている。また、実習に行く前には学内において演習を行い、実習に備え知識・技術の取得をしている。

4. 成果

GPA・授業評価は前回同様、概ね良い結果である。実習施設によって、受け持ち患児の重症度や学びが異なるため、学生の負担や学びの均一化を図り、課題の増減をこちら側で調整した。学生からの負担感に関する意見に対応できたと考える。施設によっては、受け持ち患児がなかなか決まらないことがあり、その時間を有効に活用できるよう、受け持ち体制の工

夫をする必要がある。

5. 改善

学生の個々に合わせた指導を実施する。実習場において受け持ち困難な状況であれば、2人受け持ち制の導入をしていく。

6. 教育活動

アドバイザー活動。FD 活動。

氏名 村松美恵

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
母性看護学実習	39	母性看護学実習	153

2. 理念

臨地実習では、学内の講義・演習で学んだことを臨床の現場で実際に行われている看護とつなげて思考できるよう支援したいと考えている。臨床の現場の空気感も感じ取ってほしい。

3. 方法

webclass に実習方法など実習に関するお知らせを掲載し、実習についてイメージできるよう工夫している。実習生が感じたことを言語化できるよう支援する。

4. 成果

実習評価ではおおむね良い評価を得ている。実習評価の自由記載内容については他の教員と相談しながら対応している。前年度は webclass 掲載内容の紙媒体による配布希望があり実施した。

5. 改善

カンファレンスがより充実するよう支援したい。

6. 教育活動

アドバイザーとして年に数回面談実施した。国家試験対策委員として 4 年生の受験勉強を支援した。

氏名 松本有希

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

2023年度は科目責任者として担当する科目無し

2. 理念

ケアリングに向かうために、人とつながることや、人と向き合う自己について、学生の皆さんと共に探求する。

3. 方法

・精神看護援助論Ⅱ：授業を1コマ担当した。精神看護学実習に必要な知識である、「情報の整理と活用」を担当した。

・精神看護学実習：学生の実習における対象者との人格的な交流に着目し、どのような思いや学びがあったかを確認しながら、グループ全体で共有し、体験や学びの内容を深めてるとともに、建学の精神に紐づけながら、看護師としての志向性への気づきを促す。

4. 成果

・実習での学生の体験について、学生と共にその意味付けをすることで、自らの看護観を振り返る機会を提供することができたと考えている。

5. 改善

・自己の臨床での体験を踏まえ、看護・ケアリングがより身近にとらえられるような伝え方ができるよう、今後も研鑽していく必要がある。

6. 教育活動

・アドバイザー担当学生：16名

氏名 長山ひかる

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
公衆衛生看護学実習	62	公衆衛生看護技術論演習	67
公衆衛生情報処理演習	67		

2. 理念

私が、講義をする中で大切にしていることは、講義で得た知識を臨地実習の現場で結びつけができるような内容とすることである。学生が講義、演習に参加して、保健師の仕事に少しでも興味を持ち保健師になりたいと実感できることを心掛けている。

3. 方法

公衆衛生看護技術論演習では、2年生春semesterでの公衆衛生看護技術論で学んだ知識を実際に健康教育や家庭訪問などの演習を実施していき学びを深めていくようにする。

4. 成果

保健指導や家庭訪問など個人・家族への支援の具体的な内容と健康教育の集団を対象とした看護活動を実際に演習することで、授業への関心、興味が引き出せた。

5. 改善

学生の興味関心をひきだすことができるように、わかりやすい説明、授業の内容にしているように工夫していく

6. 教育活動

アドバイザーとしてアドバイザーの相談にのっている。

国家試験対策委員として、4年生の国家試験の受験勉強の支援をしていく。

氏名 遠山大成

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

2023年度は科目責任者として担当する科目無し

2. 理念

学内で理解した保健師の思考過程や知識や、学習した技術が臨地実習にて実践につながる様にしていきたいと考えています。

3. 方法

公衆衛生看護情報処理演習にて市町村で得ることができるデータ分析の方法を学び、臨地実習でデータ収集しそのデータ分析を実践する。

4. 成果

公衆衛生看護情報処理演習にてエクセルの情報処理方法を伝える講義のコマを実施。アンケート分析に必要な技術を伝えた。

5. 改善

エクセル処理の動画作成など、どの学生でも処理が行えるようなサポートをしていく。

6. 教育活動

氏名 岩瀬美保

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
在宅看護学実習	153		

2. 理念

在宅看護の対象である療養者と家族の理解に努め、生活の場における看護実践の特性と看護過程

程を理解し、生活の場における看護技術の専門性を考察する実習を行う。

在宅療養者の生活の質の向上に向けた法や制度の活用を理解し、地域包括ケアシステムの重要

性、多職種の連携・協働を学ぶ実習を行う。

3. 方法

実習 10 日間 学内実習（看護過程の展開 1 日）

1.在宅看護の対象である療養者と家族を総合的に捉え理解する。

2.訪問事例において、療養者とその家族を療養生活のアセスメントし、課題解決に向けての看護過程を考える

3.訪問看護の実際から、療養者と家族の生活に応じた援助方法を理解する。

4.地域包括ケアシステムにおける看護の継続性や多職種の連携の実際を学び、療養者・家族を

支える社会資源の活用について理解する。

5.看護学生としての礼節を重んじ専門職種としての態度・姿勢について学ぶ

4. 成果

学生は訪問看護にふれ、生活と治療の融合について考え、また家族が看護の対象であるこ

とを実習実践をとおして理解ができていた。

5. 改善

複数回訪問ができる療養者宅への訪問を増やし、より対象理解を深めていく必要がある。

6. 教育活動

地域在宅看護学概論Ⅱ、地域在宅援助論 講義

【多職種連携、協働、ケアマネジメント、外来看護】

氏名 太田知実

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
教育学	50	教育学	88
ボランティア演習	107	教育原理	20
教育制度論	9	教職概論	25
教育課程・方法論	10	教育制度論	30
教育課程論	30		

2. 理念

授業では、良い教育に関する「正解」ではなく、「良い教育とは何か」を考える手がかりとなる様々な発想をお伝えすることを心掛けています。学生が、教育をめぐる知見を用いて、これまで家庭・学校・社会で受けてきた教育を振り返り、自分なりに教育に関する考えを深められることを目指しています。

3. 方法

授業では、こちらが一方的に話をするだけでなく、学生が自分で考える時間を設けるようにしています。具体的には、実践事例を文章やVTRで紹介し、学生には、まず、個々でそれらについての感想や意見を書いてもらい、その後、他の学生と交流してもらっています。授業者はそこで出た学生の意見を引き取りながら、話をするようにしています。

4. 成果

具体的な事例を示し考える時間を設けることで、学生の教育に対する関心を高め、考えを深めることに繋がっていると考えています。

5. 改善

授業アンケートの結果によれば、授業の目標を学生と十分に共有できていないように思われるので、初回で授業の目標を説明するとともに、毎回の授業の目標も明確にしていきたいと思います。

6. 教育活動

アドバイザーとして、学生の勉強・生活に関する相談にのり、大学生活を支えたいと思っています。

その他、国際交流や、養護教諭課程の学生の教員採用試験対策などを支援しています。

氏名 渥美陽子

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
英語 I (月 5)	19	英語 I (月 6)	24
英語 I (火 1)	26	英語IV(月 3)	30
英語 II (月 5)	33	英語 II (月 6)	26
英語 II (火 1)	19	英語 III (看護英語)	32
国際看護研修	11	入門リハビリテーション英語 (英語 III) (OT)	38

2. 理念

私の教育理念は、全ての学生が英語を学ぶ楽しさを体験し、異文化コミュニケーションの基礎スキルを身につけることです。英語は単なる言語スキルではなく、学生たちが国際的な視野を持ち、国内外の仲間と共に活躍するための重要なツールです。看護、リハビリテーション、社会福祉、国際教育といった多様な学部の学生に対して、それぞれの専門分野に応じた英語教育を提供し、実際の現場で役立つ英語力を養うことを目指しています。

3. 方法

1. アクティビティとタスク

授業ではペアワークやグループワークなど、コミュニケーションの多いアクティビティを取り入れています。これにより、学生たちは英語で自分の考えを伝え、相手を理解する力を養います。

2. 異文化コミュニケーション

異文化コミュニケーションの基礎スキルを学ぶために、学生たちが様々な文化背景を持つ人々と交流できる機会を提供しています。例えば、研修生来学の際には、授業の一環でインタビュー課題（ペアで実施）を行っています。また、季節の行事に関連した活動を取り入れ、「英語 II」の授業では筆記体を学び、サンタクロースに手紙を書きます。これは実際に返事が届くというサプライズがあり、学生の学習意欲を高めます。

3. 発音練習

カタカナ英語ではなく、相手に伝わる、クリアでスムーズな発音の習得を目指し、繰り返

し練習を行います。自分で言える音は聞き取れるようになるので、この練習はリスニング力の向上にもつながります。

4. 成果

これまでの授業を通じて、多くの学生が英語を学ぶ楽しさを知って自信を持つようになり、積極的に英語を使う姿勢を見せています。特に、発音練習の効果は顕著で、学生たちはクリアな発音を身につけ、リスニング力も向上しています。国際看護研修に参加した学生たちは、現地でのコミュニケーションに積極的にチャレンジし、豊かな学びの体験を得られています。

5. 改善

今後の改善点としては、オンラインリソースやデジタルツールの活用をさらに進め、学生が自主的に学習できる環境を整えたいと考えています。また、個別指導の時間を増やし、学生一人ひとりのニーズに応じたサポートを強化する予定です。学生の成長を可視化する仕組みづくりも、今後の課題です。

6. 教育活動

1. 海外研修事前研修:

海外研修に参加する学生向けに、英語での看護シミュレーション演習などを含む事前研修を実施しています。これにより、現地での実践に備え、学生の自信と準備度を高めています。

2. 研修生受入れ時の支援:

提携校からの研修生を受け入れる際に、通訳・翻訳の担当や学生間の交流を促進する支援を行っています。これにより、異文化理解を深め、国際交流の場を提供しています。

3. 学会参加支援:

学生が積極的に学会などの学術的な場に参加できるように、発表準備の支援を行っています。これにより、学生の専門知識の向上や学術的な交流が促進されています。

4. 副専攻学生向け英語ワークショップ:

副専攻学生に向けて、定期的な英語ワークショップを開催しています。これにより、専門知識を英語で表現する力を高め、国際的な視野を広げる支援を行っています。